

牛の卵巢と大網

家畜試九州・鹿児島市食肉センター出題 第24回獣医病理学研修会標本No.418



動物：牛，黒毛和種，雌，約20歳，昭和58年12月2日19：00切迫屠殺，3日採材。

臨床：昭和38年12月生。昭和58年4月7日に最後の分娩（17産目），その後1回発情がきたが老齢のため種付けせず。11月29日起立不能，30日初診，ぶどう糖と強肝剤を投与。12月2日屠場出荷。

肉眼所見：全身の脂肪は黄色を呈していた。腹腔の漿膜，大網，脾の被膜などには，無色透明の液を充満した直径1ないし2cm大の嚢胞の密在した腫瘤が約2ないし3cmの厚さで表面を被うように認められた。肝には肝姪が寄生し，脾の被膜には前記したように腫瘤が付着し，腎には直径0.5ないし1cmの黒色の結石状物が散見，心の脂肪は黄色を呈していた。肺には著変はなかったが，肺門リンパ節は5×5×20cm程に腫大し，腹腔内にみられたのと同様な腫瘤の転移がみられた。腸間膜の脂肪は膠様変性に陥っていたが，腸間膜や腸間膜リンパ節には肉眼的には腫瘤の転移はなかった。卵巢は一側が鶏卵大，他側はテニスボール大となり，卵胞嚢腫となっていた。

病理組織学的所見：腫瘤は一層の柱状ないし立方上皮の配列した様々な大きさの嚢胞で構成されていた。嚢胞間には薄い結合織があり，まれに乳頭状増殖も観察された。核は大きく円ないし楕円形であり，核分裂像はみられなかった。細胞質は乏しく，細胞の遊離縁には線毛をもっ

ているものもあった（写真1，HE，×250）。線毛細胞はエオジンに濃染し，通常は非線毛細胞よりも丈が高く腔内に突出していた。嚢胞腔内には，エオジン，ムチカルミン，PASでは染まらない液が貯留していた。肉眼的に卵胞嚢腫とみられた嚢胞も大網の腫瘤でみられたものと同様な線毛上皮と非線毛上皮で構成されており，腫瘍性嚢胞とみなされた。肺門リンパ節や腹腔リンパ節には腫瘤の転移がみられた。

電顕的所見：電顕的にも腫瘤は線毛細胞と非線毛細胞から成っていた。線毛細胞は，遊離縁に線毛と微絨毛をもっていた（写真2，×4,000）。核は大きく楕円形であり，細胞質はリボゾームや細線維が豊富であり暗調であった。細線維は集合し線維束を形成しているものもあった。非線毛細胞のあるものは遊離縁に微絨毛をもっていた。核は円ないし楕円形であり，切れ込みがしばしばみられた。細胞質は細線維に富んでいたが線維束の形成はみられなかった。中等数のミトコンドリアや少数の粗面小胞体が観察され，一般に明調であった。線毛細胞と非線毛細胞はデスモゾームで連結されていた。上皮下には薄い基底膜があり，その周囲を線維芽細胞が取り巻いていた。

病理組織学的診断：線毛細胞を特徴とする卵巢原発の嚢胞状腺癌。